

小グループによる発表と討議を中心とした授業の展開

附属教育実践総合センター・太田佳光

1、これまでの授業の評価と課題

教育実践に関わる授業として、本授業は、平成5年に授業者が本学部着任以来、毎年開講している教職に関する選択科目である。3年生の後期に開講されるため、教育実習を終えたばかりの学生の意欲・関心は高く、本年度は55名の学生が受講した。いずれの受講生にも、積極的な授業参加の姿勢を見ることができた。

本授業に対する、これまでの授業評価による主な評価点は、以下のようにまとめることが出来る。

第一に、授業内容について。

本授業は、学生がさまざまな問題を主体的にとらえ、その対応策を、教師になった自分自身の問題として考えることをねらいとしている。そのため、非行やいじめなどの現代のわが国の教育問題を取り上げ、その対応について具体的に考察することとしている。また、ビデオ映像や実践資料を使用し、実際の問題場面を提示し、それについての具体的対応の考察を大切にしたい。

授業概要は、以下の通りである（昨年度と同一）。

- ①教育問題の現状と課題
- ②授業妨害と逸脱（1）中学生日記を事例として
- ③授業妨害と逸脱（2）逸脱論とボンド理論
- ④逸脱行動と立ち直り（1）実践事例からの考察
- ⑤逸脱行動と立ち直り（2）：ラベリング論と生徒指導
- ⑥逸脱行動の現状と課題：教師の役割とは
- ⑦第1回から第6回までの補足説明（授業の進み方により、第6回の内容が入ることもあるため）
- ⑧いじめ問題と教師（1）ある事例の検討から
- ⑨いじめ問題と教師（2）カウンセリングマインドと教師
- ⑩いじめ問題と学級集団（1）いじめの類型化と生起のメカニズム
- ⑪いじめ問題と学級集団（2）集団論といじめ
- ⑫教育問題と学級づくり（1）いじめを起こさない学級づくりとは
- ⑬教育問題と学級づくり（2）集団を意識した学級づくり
- ⑭教育問題と学級づくり（3）：人間関係を意識

した学級づくり

⑮総括的討論

こうした授業内容について、学生たちからは、関心・意欲の高まりなどを得られたなど、従来から高い評価を得ている。

第二に、授業の双方向性について。

双方向的授業を実践するために、数年前から「大福帳」というA4版の出席カードを使用している。「大福帳」には、15回分のコメント記入欄が設けられ、毎回授業終了後に、授業への感想や質問などを学生が記入し、次回授業時に学生に返却するものである。この出席カードの使用により、授業時に学生がどのようなことを考えているかを知ることができ、次回の授業にその内容を生かすことが可能となる。また、学生の質問などに個別に対応できるため、より細やかな指導が可能となる。

第三に、小集団による発表と討議について。

先に述べたように、本授業ではビデオ映像や実践資料を使用し、実際の問題場面を提示し、それについての具体的対応の考察を行う。その考察をより深めるために、一昨年より小集団による討議と発表を取り入れた。この新しい取り組みに対しても、高い評価を得ている。

2、本年度の授業の工夫

これまで、おおむね良好な評価を得ている本授業であるが、さらにより良い授業展開への工夫も必要である。そこで、本年度は、これまでの取り組みを生かしながら、小集団による発表と討議に焦点化した取り組みを行った。

昨年度より、エルモの教材提示装置を使い、小グループの発表を行うこととした。すなわち、授業者による問題提起（多くは、ビデオ映像を使用した問題場面の提示）の後、小グループによる話し合いを行い、そのまとめをA4用紙に書き写し、全体に発表させた。ただ、小グループによる話し合いを重視したため、その後の、全体での深まりや思考に問題があると感じていた。

そこで本年度からは、上記の小グループによる

話し合いとまとめを授業の最後に行い、翌週の授業で、小グループによる発表（1～3グループ）、その後の討論という流れに変える事とした。そのねらいは、問題提起→小グループによる話し合い→発表→討論、という昨年までの流れでは、どうしても最後の討論の時間が制約され、深まりが見られなかったからである。すなわち、本年度は、討論による学生たちの思考の深まりをより重視した授業を企図したのである。

3、学生による授業評価の概要

授業終了時に、学生に対して無記名のアンケート調査を実施した。なお、実施の際には、次年度の授業改善に用いることと、成績評価には関係しないことを確認した。また、提出場所は、教員の目が届かない、教室前方隅の机を指示し、学生の本音の評価を得られるよう配慮した。そして、当日出席の学生40名からの回答を得た。

アンケートの概要については、本年度は自由記述方式を用いた。数量的評価を用いなかったのは、本アンケートを今後の授業改善への一助としたい思いが強かったからである。（自由記述による、より詳細な感想や要望を中心として知りたかったから）。

調査項目は、本授業に対して、1) 評価できる点、2) 改善すべき点、3) 授業への感想、である。以下、それぞれの項目毎に、代表的な意見を提示してみたい。

1) 評価できる点—本年度の取り組みについて

「様々な実践例を見ることができてよかった。それらを焦点化してグループでまとめたのも、とても勉強になった。複数の意見を折り合わせて考察することは、とても有意義な活動だった。考えが広まり、深まった。今後も続けてほしい。」

「グループでの話し合いがたくさんあったので、他の人の考えをたくさん聞けて、自分の考えを深めることができた。」

「授業で取り上げられていた映像が実践的でとてもよかった。また、グループディスカッションも他の人の意見が聞けてよかった。」

「ビデオなどが大変分かりやすい内容となっていて、授業内容を理解しやすかった。グループディスカッション後、質疑応答の時間がきちんと設けられていたり、話し合いの時間を十分にとられていたり、時間配分もちょうど良かった。」

以上の意見に代表されるように、小グループによる話し合い、全体での話し合い活動に対する肯定的評価が多く見られた。したがって、本年度の授業改善の試みは、概ね成功したと考えられる。

また、例年の評価点同様、取り上げた映像教材に対する評価も高かった。

2) 評価できる点—その他の部分について

「文字と言葉だけで授業を進めるのではなく、理論が実際の現場においてどのように現れるのか、どのように用いられるのかということ映像を通して知ることができたので、とても分りやすく、記憶にも残りました。」

「客観的にとらえたり、自分ならどうするか考えたりする経験は楽しかったし、自分の中で確かな力になったと思います。」

「私はなかなか理論と実践を結びつけることが出来ずにいました。そのため、本授業はとても参考になりましたし、勉強になりました。」

以上の意見に示されているように、理論と実践が関連しやすいように配慮し、実践力の育成を企図した授業展開に対する肯定的評価も多かった。

3) 改善すべき点

嬉しいことに、改善すべき点は、ほとんど記載がなかった。ただ、グループの編成、授業の進め方に対して、以下の指摘があった。

「途中でグループの編成かえをしてもいいかなと思いました。」

「前半映像を見て話し合いをし、翌週発表と言う流れが続き、単調だった。」

こうした指摘は、次年度の授業改善に取り入れたいと考えている。

4) 授業への感想

「現場での先生の奮闘を知り、その上で子どもと関わることの喜びを、授業を通して実感することが出来ました。映像を見るたびに、すごく感動して、教師っていいなと思いました。」

「この授業を受けて、私の教師観が変わりました。子ども同士のつながりを大切にし、教師はそれを作ってやれる環境作りを行うことの大切さなどを、深く考えることが出来ました。がんばって、素敵な先生になります！」

「最後はやっぱり教師っていいなと思えることが出来ました。」

これまでの授業を実施した経験から、現場の厳しさばかりを強調するのではなく、教師への思いを強めるような授業展開を企図していた。そのことに対する感想が多く見られ、その点については満足している。

以上のように、おおむね本授業に対する学生の評価は高いことが分かったが、今後改善すべき点も多くあると考えている。次年度に向けて、さらに改善を図っていきたい。